東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所

要覧 1977

目　　次

概　要

歴史と性格 …… 1

組　織 …… 2

研究活動

共同研究プロジェクト …… 4

言語情報機械処理 …… 6

言語研修 …… 7

海外学術調査 …… 8

助手等の現地投入 …… 9

外国人研究員ほか …… 10

施　設

図 書 室 …… 11

音声学実験室 …… 12

電算機室 …… 13

職　員 …… 14

出版物一覧 …… 16

概　　要

歴史と性格

アジア・アフリカ言語文化研究所は，人文科学・社会科学系では，わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究，ならびにこれらの地域における諸言語の辞典編纂，および教育訓練を行なうことにあります。

すなわち：

1）アジア・アフリカの言語，およびそれを通じて，これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。

2）それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。

3）それらの言語習得を助けるため，言語研修を実施すること。

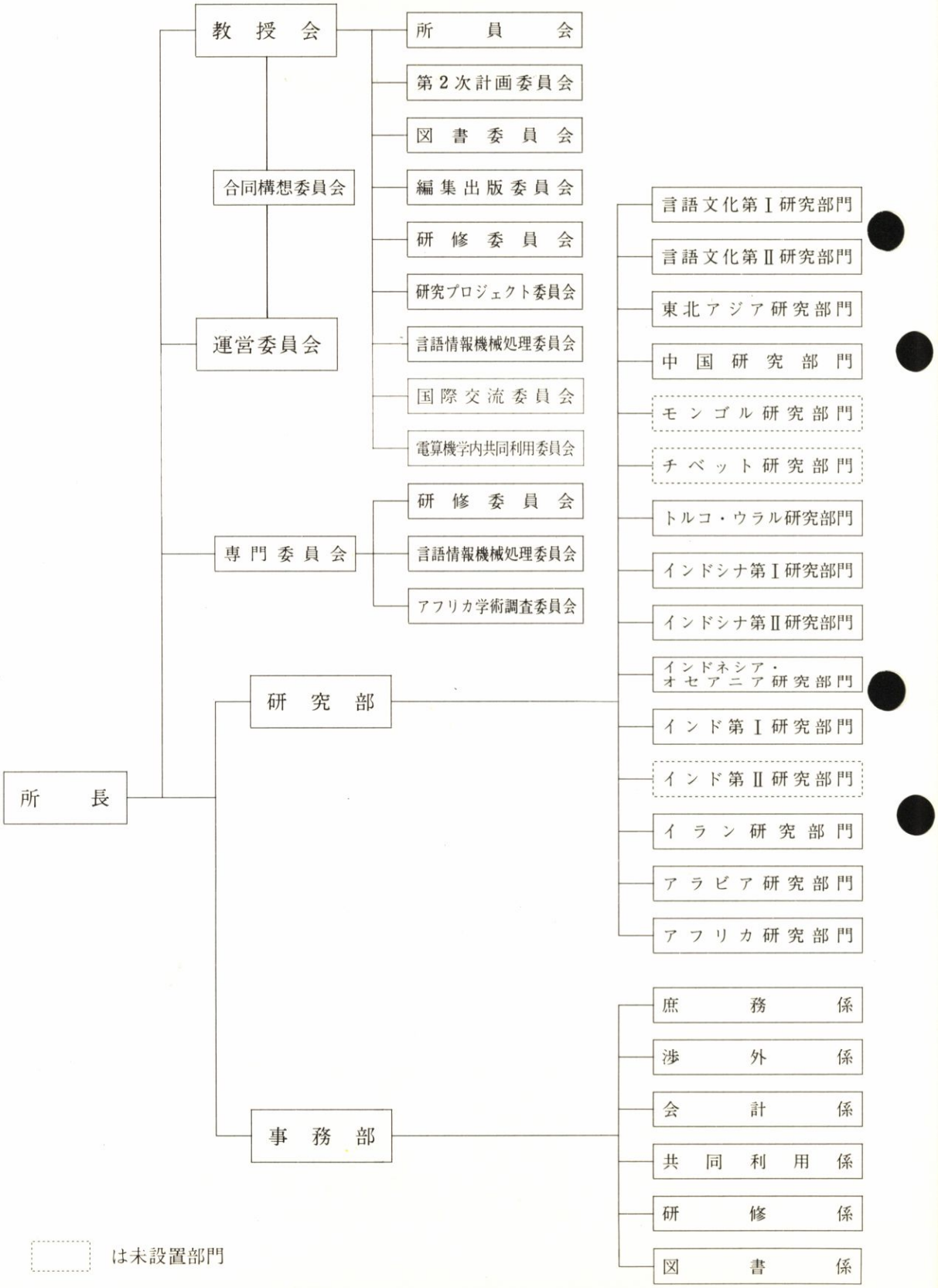
以上の三点が本研究所の主要な目的です。

＊　　＊　　＊

共同利用研究所はあらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し，相互の接触や交換の機会をつくり，それによって研究の発展・進歩を促すところにあります。

戦後日本の復興が進むとともに，その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後，各方面の理解と協力を得て，1964年4月1日に，東京外国語大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来，整備拡充が進み，今日では12部門の研究所に成長していますが，今後さらに3部門の増設が予定されています。

組　　織


所　長
教授会
所員会
第2次計画委員会
図書委員会
編集出版委員会
研修委員会
研究プロジェクト委員会
言語情報機械処理委員会
国際交流委員会
電算機学内共同利用委員会
合同構想委員会
運営委員会
専門委員会
研修委員会
言語情報機械処理委員会
アフリカ学術調査委員会
研究部
言語文化第Ⅰ研究部門
言語文化第Ⅱ研究部門
東北アジア研究部門
中国研究部門
モンゴル研究部門
チベット研究部門
トルコ・ウラル研究部門
インドシナ第Ⅰ研究部門
インドシナ第Ⅱ研究部門
インドネシア・オセアニア研究部門
インド第Ⅰ研究部門
インド第Ⅱ研究部門
イラン研究部門
アラビア研究部門
アフリカ研究部門
事務部
庶務係
渉外係
会計係
共同利用係
研修係
図書係
は未設置部門

運営委員会

研究所の日常の業務の運営は，教授・助教授の組織する教授会において行われますが，共同利用研究所としての公開性を保つため，これとは別に運営委員会が置かれ，研究所の運営の基本方針などの重要な事項について，所長の諮問を受けます。運営委員には，研究所の教授・助教授，および所外の学識経験者など，25名以内が委嘱されます。1977年度の運営委員は以下の通りです。

荒　松雄	東京大学教授	中根千枝	東京大学教授
石川栄吉	東京都立大学教授	西田龍雄	京都大学教授
伊地智善継	大阪外国語大学学長	服部四郎	東京大学名誉教授
梅田博之	所員	伴　康哉	大阪外国語大学教授
岡田英弘	所員	坂野正高	国際基督教大学教授
小沢重男	東京外国語大学教授	藤枝　晃	京都大学名誉教授
小泉文夫	東京芸術大学教授	松山　納	東京外国語大学教授
小堀　巖	東京大学助教授	三根谷　徹	東京大学教授
柴田　武	東京大学教授	護　雅夫	東京大学教授
祖父江孝男	国立民族学博物館教授	山田信夫	大阪大学教授
田町常夫	九州大学教授	山本　登	慶応義塾大学教授
富川盛道	所員	渡辺武男	東京大学名誉教授

専門委員会

また，所長の諮問に応えて，研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会が三つあり，それぞれ所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1977年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

池上二良(北海道大学教授)，伊地智善継，小沢重男，柴田武，中根千枝，西田龍雄，服部四郎，半田一郎(東京外国語大学教授)，伴康哉，松山納

言語情報機械処理委員会

植村俊亮(工業技術院電子技術総合研究所主任研究官)，田町常夫，中山和彦(筑波大学教授)，長尾真(京都大学教授)，西村恕彦(工業技術院電子技術総合研究所主任研究官)，渕一博（工業技術院電子技術総合研究所研究室長)

アフリカ学術調査委員会

泉井久之助(京都産業大学教授)，今西錦司(京都大学名誉教授)，岡正雄(元所長)，小堀巖，江実(岡山大学名誉教授)，中根千枝，服部四郎，山本達郎(国際基督教大学教授)，和崎洋一(天理大学教授)，渡辺光

研　究　活　動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は，所員が個人研究テーマを持って研究を行なうとともに，所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり，共同研究プロジェクトを組織し，研究を進めています。1977年度のプロジェクトと共同研究員は以下の通りです。なおカッコ内は研究代表者です。

言語研修（梅田博之）

荒井伸一（大阪外大）
大東百合子（津田塾大）
大野　徹（大阪外大）
五島忠久（帝塚山大）
清水　茂（京大）
武居喜春（天理大）
千野栄一（東京外大）
司 博 閣（東京外大）
西江雅之
（アジア・アフリカ語学院）
橋本　勝（大阪外大）
波多野太郎（東洋大）
村崎恭子（東京外大）
頼 惟 勤（お茶の水女子大）
シャームスンダル・ジョーシー(東京外大)
ナレーシュ・マントリー
（アジア・アフリカ語学院）

辞典編纂プロジェクト（橋本萬太郎）

石沢良昭（鹿児島大）
伊地智善継（大阪外大）
伊東照司（東京外大）
糸賀　滋(アジア経済研究所)
鵜殿倫次(東京外大・大学院)
大河内康憲（大阪外大）
落合守和（都立大）
小野　茂（都立大）
辛島　昇（東大）
川本邦衛（慶大）
日下恒夫（関西大）
慶谷寿信（都立大）
坂本比奈子（東京外大）
佐藤　進（富山大）
讃井唯允（都立大）
沢田啓二（天理大）
秦　宏一（都立大）
高橋　保（大阪外大）
戸川芳郎（東大）
長尾光之（福島大）
中川正之（広島大）
西田龍雄（京大）
新田春夫（東京医科歯科大）
野副由美子（お茶の水女子大）
平井勝利（名大）
吹抜悠子
福田権一（中京大）
本名信行（金城学院大）
増野　仁（都立大・大学院）
松村文芳（鹿児島経済大）
松本　昭（広島大）
ソエレン・エゲロット(ＡＡ研)
ジョン・シコスキー
（カリフォルニア大）
ネアック・ソック・チョムラン
チンタナ・保川（東京外大）
余 靄 芹

言語処理研究（坂本恭章）

及川昭文（筑波大）
沢村正信（神戸商大）
杉田繁治（国立民族学博物館）
中島　久（青年海外協力隊）
星　実千代
堀口秀嗣（国際基督教大）

アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究（三木　亘）

石田　進（中東経済研究所）
板垣雄三（東大）
片倉素子（津田塾大）
可児弘明（慶大）
木村喜博（アジア経済研究所）
佐藤次高（お茶の水女子大）
谷　　泰（京大）
中村尚司（アジア経済研究所）
奴田原睦明（東京外大）

福井勝義（国立民族学博物館）　松原正毅（国立民族学博物館）　山田　稔（東京外大）
本多義昭（京大）　宮本常一（日本観光文化研究所）　渡辺金一（一橋大）
前嶋信次（慶大・名誉教授）　山内昌之（横浜市大）

アフリカ部族社会の比較調査（富川盛道）

江口一久（国立民族学博物館）　福井勝義（国立民族学博物館）　和崎春日（慶大・大学院）
端　信行（国立民族学博物館）　松園万亀雄（横浜国大）　和田正平（国立民族学博物館）

南アジアの大河流域における農村社会の研究（原　忠彦）

石井米雄（京大）　桐生　稔（アジア経済研究所）　柳沢　悠（横浜市大）
長田満江（アジア経済研究所）　茭口善美（駒沢大）
辛島　昇（東大）　中村尚司（アジア経済研究所）

ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究（飯島　茂）

岩田慶治（東京工大）　長野泰彦（東洋文庫）　星　実千代
関根康正（東京工大）　西　義郎（鹿児島大）　山本勇次(甲南イリノイセンター)
立川武蔵（名大）　西田龍雄（京大）　ロルフ・ギーブル(東大・大学院)

アジア・アフリカ諸言語についての文法研究（奈良　毅）

小田真弘（中京大）　鳥羽季義（日本ＳＩＬ）　三谷恭之（京大）
古賀勝郎（大阪外大）　中島　久（青年海外協力隊）　村崎恭子（東京外大）
坂田貞二（拓殖大）　長　弘毅(アジア・アフリカ語学院)　山田幸宏（高知大）
崎山　理（大阪外大）　早田輝洋（九大）　金 東 俊（拓殖大）
田中敏雄（東京外大）　原　　誠（東京外大）　金 吉 鎔（慶大）
田村すず子（早大）　溝上富夫（大阪外大）

アルタイ学辞典の編纂（岡田英弘）

加藤直人（日大・大学院）　志茂碩敏（東洋文庫・研究生）　森川哲雄（九大）
神田信夫（明大）　細谷良夫（弘前大）　山田信夫（阪大）
小山皓一郎（北大）　本田実信（京大）
佐口　透（金沢大）　松村　潤（日大）

インド・パーキスタン分離独立の史的研究（中村平次）

伊藤正二（アジア経済研究所）　近藤　治（追手門学院大）　森　利一（広島大）
加賀谷　寛（大阪外大）　田中敏雄（東京外大）　山口博一（アジア経済研究所）
古賀正則（大阪市大）　浜口恒夫（大阪外大）　山崎利男（東大）

文化記号論の基礎研究（山口昌男）

青木　保（阪大）　小松和彦（都立大）　平井　正（東京工大）
磯谷　孝（東京外大）　佐藤信夫（国学院大）　宮田　登（筑波大）
川本茂雄（早大）　千野栄一（東京外大）
北岡誠司（大阪市大）　徳永康元（関西外大）

言語情報機械処理

現代の電子工学の技術と数理情報の理論を高度に活用して，アジア・アフリカの諸言語の語料を大量に機械処理し，それぞれの言語の音韻論的，辞学的，統辞論的分析はもちろんのこと歴史学的，民族学的，社会学的研究のような多目的な用途に供せられるデータ・ベースの作製をはかっています。当研究所としては，最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して，この方面におけるわが国の立ち後れを克服し，又アジア・アフリカ諸国との 多面的，多角的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが，同時にこれは全国の研究者の共同利用に供されます。この目的のために，一方で各言語の語料に一定の音韻論的，統辞論的，意味論的，辞学的情報を詳定しておき，他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいようにプリント・アウトするために，トライコンやクゥイックのようなプログラムが開発され，活用されております。アラビア語，中国語，朝鮮語，クメール語， スワヒリ語，タミル語，チベット語などについては，もうデータ入力の作業がはじまっています。

ខ្ញុំ បានរៀនភាសាខ្មែរ ។　　ワタシハ クメールゴヲ オシエル

（クメール語）

한 것은 우리 어머니 것입니다　　（朝鮮語）

གང་དེ་ལ་ཀན་ཁུ་ཡི་ཐུགས་ཁམས་ཡིན་ནམ་ཟེར་ན་ཡིན

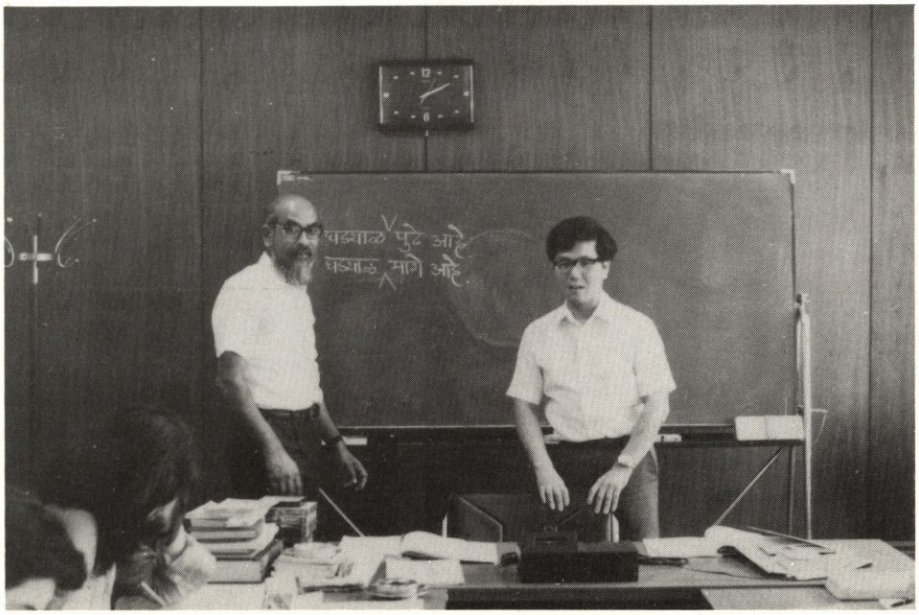
（チベット語）

เมื่อชั่วพ่อขุนรามคำแหง　เมืองสุโขทัยนี้ดี

ในน้ำมีปลาในนามีข้าว　　（タ イ 語）

言　語　研　修

アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は，わが国では開発がおくれていた分野ですが，その技術の開発のために，1967年からほぼ毎夏，実験的に，朝鮮語，ベンガル語，現代ヘブライ語，エチオピア語，スワヒリ語，ビルマ語（大阪外国語大学において），福建語，チベット語の研修を，それぞれ一言語か二言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行なうことになり，当研究所員を中心にその言語を母国語とする人，及び日本人研究者の協力をえて，同年の夏には朝鮮語，チベット語の研修を行ない，それ以降1975年にはカンボジア語，ベンガル語，1976年には大阪でビルマ語，東京でペルシア語，スワヒリ語，1977年には大阪でモンゴル語，東京で広東語，マラーティー語の研修がそれぞれ行なわれました。また1978年には大阪でペルシア語，東京ではタイ語とトルコ語の研修が行なわれる予定です。全国から公募された各言語約10名の研修生は検定料，入所料，受講料を納付し，毎日6時間，全38日，合計226時間の研修を受け，全課程を終えた人には修了証書が授与されます。



マラーティー語研修（1977年）

海外学術調査

本研究所は，その性格上，アジア・アフリカの現地調査を行なうことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りで，そのうち，（1）（4）（5）は今年度に至るまで継続されています。

（1）アフリカ部族社会の比較調査　1969年～

（2）ヨーロッパ東南部農村調査　1970年

（3）東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動　1972年

（4）イスラム圏社会・文化変容の比較調査　1974年～

（5）中国・インド文明接触地帯における文化と生態に関する調査　1975年～

ゴアの農民による収穫を祝う祭りの踊り
（中村平治）

メオのお正月における“カガイ”――ラオス
（新谷忠彦）

助手等の現地投入

アジア・アフリカの言語を自由に話し，読み，書くことができ，かつ，生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために，本研究所は助手等の若い研究者を，それぞれ2年の期間，アジア・アフリカの諸国に送っています。

この計画は1967年から実施され，現在までに合計12名がエチオピア，タンザニア，ナイジェリア，アラブ連合，インド，モロッコ，香港，ケニア，ボツワナ，ザンビア，ビルマ，ネパール等々の諸国に派遣され，そのうち2名は目下現地で研修中です。

ンガウンデレ（カメルーン）では，日曜日に，町に住むイスラム教の「王」（ラーミード）を中心とした行列が着かざって町を歩く。写真は，その最後をしめくくって馬を駆って王宮にむかって殺到する臣下たち。（湯川恭敏）

外国人研究員ほか

研究所は，その共同利用研究活動の一環として，外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ，研究上の便宜を供与します。1977年度までの外国人研究員は以下の通りです。

Gordon T. Bowles
　アメリカ　人類学専攻　1967年10月 6 日～1968年 9 月15日

Muhammad Anis
　エジプト　近代史専攻　1968年10月 2 日～12月25日

Raouf Abbas Hamed
　エジプト　近代史専攻　1973年 4 月 1 日～ 9 月19日

Yellava Subbarayalu
　インド　南インド中世史専攻　1973年10月 1 日～1975年10月31日

Fe Aldave-Yap
　フィリピン　フィリピン国語学専攻　1975年 9 月20日～12月21日

金 完 鎮
　大韓民国　韓国語学専攻　1975年 8 月20日～1976年 7 月31日

Curtis D. McFarland
　アメリカ　言語学専攻　1976年 2 月20日～1977年 2 月19日

'Abd al-Raḥîm 'Abd al-Raḥmân 'Abd al-Raḥîm
　エジプト　中東近代経済史・アラビア語学専攻　1976年 6 月 6 日～10月 4 日

Salim Abdulla Wazir
　タンザニア　教育学専攻　1976年 6 月 4 日～10月11日

Bhakti Prasad Mallik
　インド　言語学専攻　1976年 7 月13日～12月20日

Karthigesu Indrapala
　スリランカ　歴史学専攻　1976年11月 1 日～1977年 3 月31日

俞 昌 均
　大韓民国　韓国語学専攻　1977年 4 月 1 日～1978年 1 月31日

Søren C. Egerod
　デンマーク　東洋言語学・古典学専攻　1977年 9 月 1 日～1978年 5 月31日

研　究　生

また研究生の制度があり，大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは，研究生として入所を許可することがあります。研究生は入所料と研究料を納付し，指定の教官の指導を受けます。

施　　設

図　書　室

アジア・アフリカ研究に必要な図書および図書利用のための設備は，共同利用研究機関として重要な要素です。研究所開設以来図書資料は徐々に増加していますが，その充実については今後とも多大な努力を要します。蔵書の中にはアジア・アフリカ地域の国語教育資料，雑誌(385種)，新聞(54種)，世界各国語の聖書，などが含まれています。
図書の他に，マイクロ資料，各種の語学レコードおよび録音テープなどもあり，また利用者の便宜を考えてマイクロリーダーとリーダー・プリンターを備えています。

音声学実験室

「アラビア語のイントネーションなんですが，基本周波数の動きは？」
「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが…」
「フラーニー語ってどんなことばですか？　実際に録音したものがありますか？」
「言語研修に使う教材を，良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は，音声学実験室の活動のほんの一部分にすぎません。2台のサウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした種々の音声分析用機器が，フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。そのほか高性能の機器を備えた録音室では，めずらしい言語や，貴重な民話・民族音楽などのテープが複写され，またビデオ録画なども利用しながら研究分析を行なっています。

電　算　機　室

当研究所では，昭和53年１月から，HITAC M－150システムを導入しました。内部メモリは512KB，ディスク装置は４スピンドルで合計800MB，磁気テープは２デッキあります。入力にはパンチカード，マークカード，紙テープが使えます。出力のためにはラインプリンタの他に漢字プリンタがありますが，これを使用して，大きさも形も様々なＡＡ諸言語の文字を印刷できるようなソフトウエアが開発されています。

このほかのソフトウエアとしては単語の用例検索システムが準備されています。これはＡＡ諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに，原字のままでパンチ，入力し，データベース化するもので，必要に応じて何時でも任意の単語（列）の用例を検索し，それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは，文法研究や辞典べんさんの資料作成ばかりでなく，史料や調査記録の索引を作ることもでき，言語学ばかりでなく，歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

またグラフィックディスプレーもあり，ＡＡ諸言語の研修の自動化等の開発研究も行なわれる予定です。

職　　員

所長（併）　北村　　甫

研　究　部（五十音順）

教　授　飯島　　茂：アジアの国民形成
教　授　石垣幸雄：文論
教　授　梅田博之：朝鮮語
教　授　大江孝男：朝鮮語
教　授　岡田英弘：東アジア史
教授(併)　北村　　甫：チベット語
教　授　富川盛道：アフリカの社会と文化
教　授　中村平次：インド現代史
教　授　奈良　　毅：インド・アーリア諸語の研究
教　授　橋本萬太郎：シナ・チベット諸語
教　授　山口昌男：文化記号論
助教授　上岡弘二：イラン語
助教授　川田順造：西アフリカ社会
助教授　坂本恭章：アウストロアジア諸語
助教授　土田　　滋：アウストロネシア諸語
助教授　中野暁雄：セム・ハム諸語
助教授　永田雄三：トルコ近代史
助教授　原　　忠彦：イスラム教と社会
助教授　日野舜也：アフリカ都市社会の比較研究
助教授　三木　　亘：イスラム近代史
助教授　守野庸雄：日本語・スワヒリ語対照研究
助教授　家島彦一：イスラム中世史
助教授　湯川恭敏：理論言語学・バントゥ語
助　手　石井　　溥：南アジアの人類学
助　手　加賀谷良平：音響音声学
助　手　清水宏祐：西アジア史
助　手　新谷忠彦：シナ・チベット諸語
助　手　高知尾　　仁：アフリカの象徴論
助　手　辻　　伸久：中国語
助　手　内藤雅雄：インド近代史
助　手　中嶋幹起：中国語
助　手　羽田亨一：イラン史
助　手　松下周二：アフリカの言語
助　手　森　　幹男：インドシナ比較文化史
助　手　藪　　司郎：チベット・ビルマ諸語

北カメルーン Ngaoundéré の壁画から。「フルベ族の行列」（日野舜也）

事務部

事務長 文部事務官　大田脩生
事務長補佐 文部事務官　宮森てる子

庶務係

係長(併) 文部事務官　宮森てる子
文部事務官　井上由美子
文部事務官　浅野通夫
文部事務官　松本省三
文部事務官 (タイピスト)　依田かつ子
文部事務官 (守衛)　金子鍵蔵
文部技官 (自動車運転手)　塙和雄

渉外係

係長 文部事務官　隅田浩
文部事務官　佐久間敬喜

会計係

係長 文部事務官　安田隆
会計主任 文部事務官　遠藤吉則
文部事務官　田川恵二
文部事務官　石川房江
文部事務官　成瀬智
文部技官　富澤貞夫
用務員　植田カツエ
用務員　横田英一

共同利用係

係長 文部事務官　戸田孝司
文部事務官　金井京子
文部事務官　鈴木喜久子
文部事務官　津田貞子
文部事務官　松岡環
文部事務官　渡辺勇二

研修係

係長 文部事務官　石橋徳三郎
文部事務官　岡田ほなみ
文部事務官　中嶋弘子
文部事務官　福井光雄

図書係

係長 文部事務官　斉藤醇
図書主任 文部事務官　石川恵子
文部事務官　中川陽子
文部事務官　植木天津子
文部事務官　須郷知子
文部事務官　大村和子

―― 表紙の写真説明 ――

ゴアのアグアダ・レゾートで開かれた開発問題研究所アジア・太平洋学会の会議（1977年9月）の折，同会議のインド側受け入れ責任者であるプーナのゴーカレー政治経済研究所のスタッフの案内で，ゴアの旧跡をたずねる機会があった。

写真はボム・ジーザスのバスィリカ風教会堂の正面リリーフである。人も知る通り，ここにはフランシスコ・ザビエル（1506―52）の遺体が安置されている。これは大きなインド亜大陸のなかのインド文化に，もう一つの光彩を加えたものだといってよいだろう。（中村平治）

出版物一覧

アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. 1(1968), 2(1969), 3(1970), 4(1971), 5(1972), 6(1973), 7(1974), 8(1974), 9(1974), 10(1975), 11(1976), 12(1976), 13(1977).
アジア・アフリカ言語文化研究所　通信, Nos. 1～31. (1966～77).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
5. TSUCHIDA, S., *Recostruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
6. NAGATA, Y., *Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, 1976.
7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasūlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. MCFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976.
9. MCFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.

アジア・アフリカ基礎語彙集

1. 山本謙吾, 満州語口語基礎語彙集, 1969.
2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971.
3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972.
4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973.
5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974.
6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975.
7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976.
8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977.

共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.
   アジア・アフリカ諸国——国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967).
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. 1(1968), 2(1969), 3(1970), 4(1971), 5(1972), 6(1973).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. 1(1972), 2(1972), 3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. 1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(述語, 1975), 5(命令表現, 1976).
7. *Asian and African Grammatical Manual* (アジア・アフリカ文法便覧), 1972～:
   No. 11. Korean(梅田博之), 1973.
   12b. Fukienese(中嶋幹起), 1976.
   12z. Tibetan(北村　甫), 1977.
   13b. Marathi(内藤雅雄), 1976.
   14a. Cambodian(坂本恭章), 1974.
   14b. Burmese(藪　司郎), 1974.
   14c. Thai(森　幹男), 1975.
   15b. Philippine(山田幸宏, 土田　滋), 1975.
   16b. Samoan(小田真弘), 1977.
   17. Persian(上岡弘二), 1976.
   20. African(石垣幸雄), 1975.
   21. Swahili(守野庸雄), 1976.
   22a. Cushitic(石垣幸雄), 1972.
   23. Hausa(松下周二), 1974.
   26. Fulfulde(江口一久), 1974.
   33. Romance & Greek(石垣幸雄), 1973.
   33z. Maltese(石垣幸雄), 1977.
   36. Uralic *etc.* (石垣幸雄), 1976.
8. アフリカ部族社会の比較研究: 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), 2. アフリカ社会の地域性(1973).
9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1(1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, 1(1975), 2(1975), 3(1976), 4(鄒　嘉彦: 老乞大諺解単字索引, 1976), 5(坂本恭章: カンボジア語小辞典, 1976), 6(1976), 7(1977).
11. *Oceanic Studies*, No. 1(1976).
12. インド・パキスタン分離独立の史的研究　資料集1(1976), 2(1977).

AFRICAN LANGUAGES AND ETHNOGRAPHY

1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Fêrôɓe du Diamarê : Maroua et Pêttê*, 1976.
4. EGUCHI, P. K., tr. : *Shi'r al-Ṭuba (Poem of Repentance)*, 1976.
5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.

STUDIA CULTURAE ISLAMICAE

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftliks) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., *"Kacem Ali"—Monographie d'un domaine autogêrê de la plaine de Mitidja (Algêrie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algêrie)*, 1976.
7. MIKI, W. & Abd al-Rahim., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study*, 1977.

言語研修テキスト

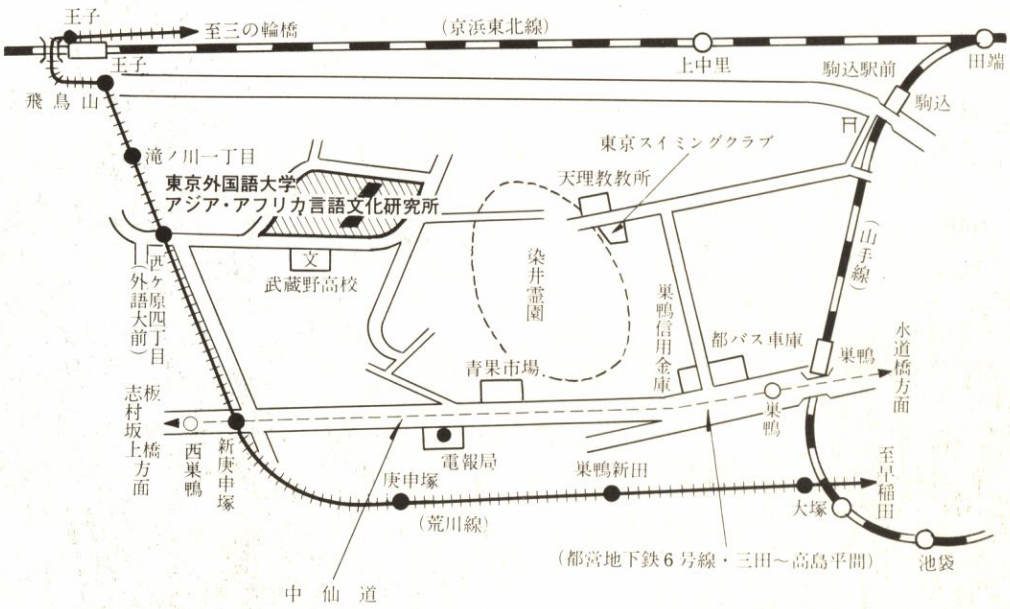
1. チベット語，北村甫ほか編，全5冊（1974）.
2. 朝鮮語，梅田博之ほか編，全3冊（1974）.
3. カンボジア語，坂本恭章ほか編，全5冊（1975）.
4. ベンガル語，奈良毅編，1冊（1975）.
5. ビルマ語，大野徹ほか編，全5冊（1976）.
6. ペルシア語，上岡弘二ほか編，全3冊（1976）.
7. スワヒリ語，守野庸雄ほか編，全2冊（1976）.
8. モンゴル語，荒井伸一ほか編，全4冊（1977）.
9. 広東語，中嶋幹起ほか編，全4冊（1977）.
10. マラーティー語，内藤雅雄ほか編，全3冊（1977）.

MONUMENTA SERINDICA

1. IIJIMA, S. ed., *Changing Aspects of Modern Nepal —Relating to the ecology, agriculture and her people*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. compl., *The Newari language—A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H., ed., Glo Skad : *A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas—Material 1*, 1977.

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA

TOKYO GAIKOKUGO DAIGAKU
4, NISHIGAHARA, KITA-KU, TOKYO 114
TEL. 03-917-6111
Cable Address : GENGOBUNKAKEN TOKYO



東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

東京都北区西ケ原4丁目51番21号 〒114
TEL 03—917—6111
国電大塚又は王子下車・都電荒川線西ケ原4丁目
(外語大前) から徒歩約5分
地下鉄・都営6号線西巣鴨下車15分